

社会民衆党・社会大衆党の 無産者芸術・文化へのまなざし

立本 紘之

はじめに

- 1 社会民衆党と無産者芸術・文化
 - 2 1932年上半期の無産政党と文化
 - 3 社会大衆党と無産者芸術・文化
- おわりに

はじめに

1947（昭和22）年2月、当時日本社会党の文化部長であった松本淳三は、雑誌の座談会で過去歴代の政府及び、政党内部に文化部を持ち、文化政策を考えたものがなかった点に触れ、

最近になつて社会党では文化部を持ち、文化政策を懸命になつてやつておるわけですが、いままでの歴史からいえば、政党にしてもまた歴代の政府にしても、映画に限らず、小説にしても絵画にしても音楽にしてもままた子扱ひのような形で来ておつた点がある。つまり民間の芸術家がいくら努力をしても、政治の面に結びついていないところに差が出て来ると思うのです。⁽¹⁾

と述べている。発言者の松本自身もまた無産政党と近い文化団体（全国芸術同盟）⁽²⁾へと一時期身を置き、中間派無産政党で宣伝・機関紙部長などの職に携わった経歴を持つ。そうした人間が、過去の政治・政党においては文化を「ままた子扱ひ」していたと述懐しているのは大きな意味を持つものであろう。

当然ながら文化というのは政府が上から押し付けるものではなく、政党にとってもその活動上文化の占める比重はそこまで大きくはない。それ故歴代の政府・政党が文化を「ままた子扱ひ」してきたのは無理もないことであろう。だが近代日本においては、政党と極めて近い距離に文化が存在していた時期があり、その時期こそ松本自身も才を揮った大正末から昭和初期なのである。

この政党と近い文化の代表が「プロレタリア文化」であろう。その中でも非合法でありながら

(1) 「新文化政策と映画（座談会）」（『キネマ旬報』再刊第17号、キネマ旬報社、1947年2月）15頁。

(2) 日本労農党を後援する文化団体として結成されるも、活動期間が1928年上半期のみと非常に短命な形に終わる。

政党組織であった日本共産党を権威として受け入れた文芸者は、見えない地下の党運動とその理論の確からしさを大衆に広く伝えるべく活動を展開した。そして自身の文芸活動を通して社会変革の一助とならんことを目指し自発的に行動した点にプロレタリア文化運動の特異性が存在する⁽³⁾。

勿論共産党自体が当時「文化部」を持っていたわけではなく、党「アジ・プロ部」傘下に文化運動が位置付けられたのも1931（昭和6）年と遅く、しかも文化運動の差配も黨員となった文化人指導者（蔵原惟人らが中心）へ完全委任するような状態であった⁽⁴⁾。そういう意味では松本の言う通りで、近代日本において政党が文化へ向けていたまなざしはそこまで強くなかったと言わざるを得ない。

では文化を「まます扱ひ」してきた諸政党の中で、「既成政党」と比べて）比較的プロレタリア文化運動から近い位置に存在していた無産政党では、文化に対しどのようなまなざしが向けられていたのだろうか。本論文では、主に無産政党右派の系譜である社会民衆党・社会大衆党の両党を対象に無産政党、その中でプロレタリア文化運動からは最も遠くに位置していたと考えられる右派無産政党において、文化とりわけ無産者芸術・文化に対し、いかなるまなざしが向けられていたのか、そして党としてどの程度文化と言うものを政党活動に組み込もうとしたのかを考察する。

そうすることで、同時代に共産党影響下にあったプロレタリア文化が一大興隆を迎えていく中、共産党と「無産者」というパイを奪い合う競合相手となった、無産政党のあり方・多様性の一面を顕在化する一つの試みとすることを目指したい。

1 社会民衆党と無産者芸術・文化

(1) 『社会民衆新聞』記事に見る社会民衆党と文化

無産政党右派に位置することになる政党「社会民衆党」は、1926（大正15）年12月5日に結成された。単一無産政党「労働農民党」を割る形で結成された同党は、同じ月に結成された無産政党中間派「日本労農党」・労働農民党と共に三党鼎立状態で活動を続けていく。

同党の活動を見ていく上で重要な史料となるのが、党機関紙『社会民衆新聞』である。同紙上では党が催した文化的イベントやプロレタリア文芸時評などが、数が多いとは言えないが記事として存在している。そうした記事を中心に社会民衆党の文化へのまなざしを見ていきたい。

同紙の創刊号（前身紙『民衆新聞』からの通号で第15号。1927（昭和2）年1月10日）には、4面に「コドモラン」と「婦人欄」が設けられている所に特徴がある。この点は例えば、無産政党左派の労働農民党を後援する政治新聞で、当時の左翼メディアの代表紙だった『無産者新聞』紙上に「コドモのせかい」欄が設けられたのが第32号（1926年6月12日）だということを考えると非常に早いと言える。

『無産者新聞』が先に始めていたからこそ、後発の『社会民衆新聞』でもこのような対応が可能であったとも考えられ得るが、政党機関紙として見れば、労働農民党の機関紙『労働農民新聞』のこの時期の紙上に子ども・婦人向け欄が存在しないことを考えると、『社会民衆新聞』の特異性が

(3) この点に関しては、拙著『転形期芸術運動の道標——戦後日本共産党の源流としての戦前期プロレタリア文化運動』（晃洋書房、2020年3月）に詳しい。

(4) 前掲拙著第五章及び、風間丈吉『『非常時』共産党』（三一書房、1976年）153頁他参考。

うかがえる。しかしながら同欄は創刊早々の第19号（1927年3月6日）以降姿を消し、以後定着しない形に終わってしまう。

また同紙では創刊号から白柳秀湖「怪行者不二丸」の連載が始まっている。著者の白柳に関しては同紙第22号（1927年4月20日）掲載の新刊紹介記事の中でその経歴（社会民衆党中央委員）に触れた後、彼が「社会講談の方面に一家をなしてゐる人」であるためその著作は「文芸戦線の人たちの書く共産党の宣伝文のやうなスूपのだし殻とは異つて、一種の風韻があり、読みごたへがする。」「極手近な世相を科学的知識を以て直截に究明してゐる」と説明されている。

この作品は所謂「時代物」のテイストで書かれた読物である。そしてプロレタリア文芸の領域で時代物作品が登場するのは、1928（昭和3）年初頭（落合三郎「佐々木孝丸」「山嶽党」（『前衛』1928年1月号）他）を待たねばならない。そういう意味では、「社会講談」の第一人者である白柳を有していた社会民衆党の方が一歩先を行っていたことは考慮される必要がある。

大なる期待と共に始まった意欲作「怪行者 不二丸」だが、第23号で全9回の連載を終了する。そしてこれ以後『社会民衆新聞』紙上に読物記事の掲載がなされることはなかった。

『社会民衆新聞』紙上看られる社会民衆党の文化への取り組みとしてもう一つ重要なのが、党主催の文化イベント「民衆の夕」である。1927年6月12日に開催されたこの催しの「プログラム」が、同紙第24号（5月15日）に掲載されており（文末表a）、映画と講演の二本立てを軸にした形のシンプルな催しであることが見て取れる。

「民衆の夕」終了後、同紙第26号（6月19日）にルポ記事が掲載された。同記事にはイベント内での社会民衆党党首 安部磯雄の挨拶について書かれた部分が存在し、安部が「慰安娯楽休養も矢張り社会人の必要物です。我々は無料で斯かる良材を摂取し得る社会を作りたい。その為めにも労働者が社会的政治的实力を有たねばなりません」「アイスクリームはどうか知らぬが、夏の氷水位は此意味でも無料で消費し得る事は、既に欧米の常態」と述べたのに対し、「観衆ヤンヤの喝采」で応えたとの記述がある⁽⁵⁾。

この記事からは、「民衆の夕」の目的が労働者の「慰安」であり、労働者が真に慰安を得られる社会を作るために自党への支持を（言い方は悪いが慰安を餌に）訴えるための催しだということがうかがえよう。つまり「民衆の夕」は、特定の団体が特定の思想を宣伝煽動することを目的としてはいないという所に、逆に無産者向けのイベントとしての特異性を持つと言える。

また映画二本上映というのも特徴的であり、『無産者新聞』主催の「無産者の夕」（1926年10月）が、複数のプロレタリア演劇の上演イベントであったのと比べると、「民衆の夕」の特徴が浮かび上がってくる。つまり複数の映画フィルムを一度に借り、長時間の円滑な上映を可能とする会場・弁士を確保できる資本力・人的交流を持った組織としての社会民衆党の地力が「民衆の夕」からはうかがえるのである⁽⁶⁾。

(5) きむら生「民衆の夕 ベンチの後」（『社会民衆新聞』第26号、1927年6月19日）。

(6) 後年の無産政党中間派全国大衆党主催「インタナショナルの夕」では、東京での「夕」で借りた映画フィルムが、大阪の「夕」に使い回せぬ契約だったことが史料から明らかになっている（平野学書簡（大原社会問題研究所所蔵資料（以下大原と略）「政党16-19」）。また前身の日本労農党時代に木村毅（同党機関紙部長）原作の「島原美少年録」を支部単位でも上映する「夕」の計画があった（『日本労農新聞』第14号、1927年7月15日）ことを考えると、映画の長期貸借に必要な資金・人的保証の可否にイベントの成否が左右される部分もあったようである。

対して『無産者新聞』社及び、同社と関係のあった文芸者の側では、1927年当時の段階で映画の領域に本格的に携わる人間が存在しなかった⁽⁷⁾。そのため、自発的な協力を得られ、かつ当時の一般的な評価も高かったプロレタリア演劇の上演という形のイベントであったのはある種必然であったと言えよう。

これ以降も「民衆の夕」は定期開催のイベントとなる。そして党中央が東京で開催するものだけでなく、地方支部単位でも独自の「民衆の夕」が開かれていたことが『社会民衆新聞』記事からうかがえる。例えば27年8月「神奈川県田島分会」で開かれた「民衆の夕」に関する記事には、その演目として「浪花節」「腹芸や支那曲芸」＝民衆娯楽が催され「町民を心ゆくまで喜ばせた」ことが記され、加えて、

われわれ無産政党の陣営は全民衆の支持を得てかゝる『民衆の夕』を通じて愈々その結束を固めつゝ、清き活動資金が集められてゆく。⁽⁸⁾

という言説が記事上に見られる。ここに「民衆の夕」のもう一つの目的＝活動資金の獲得が表れていることがわかる。前述した第一回の「夕」の安部磯雄の挨拶に「無料で斯かる良材を摂取し得る社会を作りたい」とあったが、その目的を達成するために党の活動資金が必要であるのは言うまでもない。まして県単位ですらない地方支部の催しである。当座の活動資金獲得と労働者慰安、そして可能な限り党への支持をもたらす、という意味では「民衆の夕」は格好の事業だったと言える。

このことは『社会民衆新聞』第30号（1927年8月15日）掲載の岩手での「民衆の夕」関連の記事で、同イベントが「社会民衆党事業部後援」となっていることから明らかとなる。党財政の一環を担う党事業部の後援で地方でも「民衆の夕」を開催、得た収入を党に還元させ財政健全化を図るというのは、程度の差こそあれ絶えず財政難・党費未納等に悩まされ続けた無産政党にとっては、非常に大きな意味を持つ活動だったのであろう。

『社会民衆新聞』はその後1928年中に財政難で刊行不能に陥るが、翌1929（昭和4年）に刊行が復活する。その間も「民衆の夕」は継続的な催しとして定着し、さらに新たな展開を見せていく。

そのことが示された記事が、同紙再刊第6号（1929年5月25日）「民衆芸術の運動起る 研究会を組織し「民衆の夕」を開く」である。そこには、

久しく、左派に独占されたかに見へたプロ芸術運動も、遂に右翼社会民主主義の旗の下に、芸術の民衆化を目指して進むべく、我民衆党芸術研究会が組織されるに至つた党からは片山書記長、赤松克麿氏、安部磯雄氏が参加し文壇では菊池寛氏、水谷竹紫氏⁽⁹⁾、漫談の徳川夢声氏

(7) プロレタリア文化運動の領域における映画への本格的な働きかけは、「全日本無産者芸術聯盟」（ナップ）創設の1928年及び、同組織改組・専門性強化で「プロレタリア映画同盟」（プロキノ）が誕生した1929年頃まで待たねばならない。また商業映画界で所謂「傾向映画」が盛んになるのも、この時期（藤森成吉原作「誰が彼女をさうさせたか」1930年他）である。要するに1927年当時映画はプロレタリア文化の中の未開拓領域だったと言える。

(8) 『社会民衆新聞』第29号（1927年8月1日）。

(9) 第一回「民衆の夕」で上映された映画『九官鳥』の主演女優水谷八重子の義兄（姉の夫）。演劇団体「芸術座」にも参加、創始者島村抱月死後の同団体再興に貢献した著名な文化人。映画会社松竹とも深い関係を持ち、「民衆の夕」での映画上映に貢献した人的交流ルートの一つと考えられるか。

が中心となり、顧問には馬場恒吾、吉野作造、白柳秀湖氏等が挙げられた、時折、会合して民衆芸術の研究会も開く由

と記されている。つまり1929年5月になってようやく、社会民衆党がその党活動の一環として「芸術研究会」を組織し、「右翼社会民主主義」芸術運動を掲げて動き出したということになる。党のプロジェクトとして、党幹部・外部文化人を一堂に会した芸術運動の研究会を開くというのは、他の政党では見られないものであり、27年以降積み重ねてきた「民衆の夕」での経験・実績及び、外部文化人との人的交流が豊富な社会民衆党であるからこそなし得た運動の形と言えよう。

同号の『社会民衆新聞』には、研究会の結成直前に行われた「民衆の夕」（5月11日）に関する記事が掲載されている（文末表b）が、映画を軸に「芸術研究会」メンバーにもなった徳川夢声の漫談と歌手による歌唱という、従前と同様の形式のイベントだったようである。また同記事には、

尚今後、陣容を整へ、諸種の催し物を民衆本位に廉価にて、ともに^ま楽^まき真の『民衆の夕』を実現させて、社会民衆党の外郭としての芸術的方面に大飛躍をすると幹部連は意気込んで居る⁽¹⁰⁾

との記述がある。「夕」開催日と「芸術研究会」結成日、新聞刊行日との都合により時系列が交錯気味だが、芸術研究会の旗の下に、芸術運動を「社会民衆党の外郭」として位置付ける旨が党の「幹部連」の意気込みとして語られている所に、この時点での社会民衆党の文化への強いまなざしがうかがえる。少なくとも27年段階での「党資金源」「慰安」を主目的とする文化活用段階からは一歩前進したと言えよう。

とは言え「党資金源」を目的とした「夕」という考え方は放棄されてはおらず、1930（昭和5）年の社会民衆党大会の報告書では、「民衆芸術協会」主催となる「夕」が「事実上は我党事業部の事業であつて、その純益金は我党財政にくり入れられるものである」と謳われ、同年の「夕」で「七百元」の純益を出したとの記述も存在する⁽¹¹⁾。「民衆の夕」が社会民衆党にもたらすターンの大きさを考えると同党の文化事業への積極性は理解できる。

このように開催・発展が謳われた「民衆の夕」だが、『社会民衆新聞』の紙上でその後取り上げられるのは、2年後の1931年6月まで待たねばならない。同紙再刊第29号（1931年6月15日）・30号（7月25日）に掲載の「第四回 民衆の夕」の広告記事がそれである（文末表d）。

イベントとしてはこれまで通りの「夕」のスタイルを踏襲しているが、「講演」・「漫談」の類が完全に姿を消し、映画・歌曲を中心とする構成＝民衆娯楽寄りのプログラム、となっている。

そしてこれ以後『社会民衆新聞』紙上で「民衆の夕」に関して取り上げられることはなくなり、1932（昭和7）年7月の無産政党合同による社会大衆党結成を迎え、「民衆の夕」は社会民衆党の名と共にその歴史に幕を下ろすこととなる。

(10) 『社会民衆新聞』再刊第6号（1929年5月25日）。

(11) 『第五回大会報告書 我等は如何に闘つたか1930』（社会民衆党本部、昭和5年12月7日）95頁。また1931年8月の「夕」に関しては、32年1月の大会報告書に詳細な収支記載があり、悪天候ながら「三百十九円六十七銭」の純益だった旨記されている（『社会民衆党 五ヶ年闘争史』（社会民衆党書記局、1932年1月19日）170頁）。

(2) 『社会民衆新聞』記事に見る社会民衆党と無産者芸術

これまで述べてきた社会民衆党の文化へのまなざしに加え『社会民衆新聞』紙上では、当時隆盛へと向かいつつあったプロレタリア文化運動に関する言説も垣間見られる。

同紙創刊直後の第18号（1927年2月20日）「文芸欄」に、友田本二「所謂プロレタリア＝文芸家の蒙を啓く」という記事が掲載されている。同記事で友田はプロレタリア文芸が振わない理由を述べつつ、宣伝煽動（アジプロ）優先でなされるプロレタリア文芸を全面的に批判する一方で、「相愛的理想主義」と友田自身が述べるような、社会民衆党の運動理念に近い方面から創作が行われるべきだと説いている。

だがここで、考慮せねばならない当該期プロレタリア文芸の状況が存在する。友田の記事が書かれた時期のプロレタリア文芸は、文芸者が文芸者のままで（実践運動に没入せず）社会運動陣営内における自らの有用性を模索する段階が依然継続中であった⁽¹²⁾。

その結果この時期ようやく一般的にも評価に値するような作品群（葉山嘉樹「海に生くる人々」「淫売婦」など）が表れ始めていた。友田は記事の中で葉山や藤森成吉（代表作「何が彼女をさうさせたか」の発表は1927年）を高く評価しているが、このことは逆説的にプロレタリア文芸が、友田の指摘する問題点を超克し始めていた証左であると言える。

つまり、友田の評価はある意味一面的で、「過渡期」のプロレタリア文芸を過小評価する所から来る産物であると解するのが至当ではなかろうか。

だが一方、プロレタリア文化運動ではこの時期運動の組織化が進み始めており、1925（大正14）年12月「プロレタリア文芸聯盟」が結成され、翌年11月には同組織を再組織して「プロレタリア芸術聯盟」（プロ芸）が結成された。そしてこの組織化の背景に存在したのが、所謂福本イズム（日本共産党再建を主導した福本和夫の思想・理論）であった⁽¹³⁾。

福本和夫の影響が拡大する中、友田の言葉を借りれば芸術を「社会変革の具」と捉える考えも顕在化し始め、1927年6月には福本イズム支持をめぐるプロ芸は組織分裂を起こすまでに至る。

この点を考えれば（プロ芸組織分裂直前の時期の『社会民衆新聞』に寄せられた）友田の評価はこの点では的を射たものだとも言えよう。友田の一見相反するようなプロレタリア文芸への評価軸こそある意味、外側から見たプロ芸の実状を的確に反映していたのかもしれない。

友田の記事以降、前述した休刊期間を挟み長らく『社会民衆新聞』紙上にはプロレタリア文芸に関する記事掲載がなかった。次にプロレタリア文芸関連記事が登場するのは再刊第20号（1930年7月10日）のことである。しかも単独記事ではなく、同号4面の大半を費やした一大特集記事となっていた。

この特集の冒頭を飾っていたのが赤松克麿（機関紙部長）の署名記事「芸術理論を確立せよ！プロレタリア・リアリズムの新芸術運動を捲き起せ」である。この記事において赤松は、

(12) 前掲拙著第一章及び、拙稿「プロレタリア文化運動の「理論化」の意義と諸問題」（中川成美・村田裕和編『革命芸術 プロレタリア文化運動』（森話社、2019年）137-139頁参考。

(13) 前掲拙著第三章参考。

近時プロレタリア芸術運動が目覚しく文壇に進出して来ましたが、我々の観察を以てするならば所謂左翼芸術なるものは、全く紋切り型の公式主義に墮し、生硬なる闘争理論にわざとらしき芸術的衣装を着せたものであります。従つて真に無産大衆の心魂を揺るがすやうな芸術的魅力に欠けて居ります。社会運動における芸術の重要性を認める我々は、この行き詰まれる左翼芸術を一蹴し、真に無産階級のリアリズムに立脚する正しいプロレタリア芸術を建設すべき切実なる必要に迫られて居ります。こうした要望は最近我々の陣営内に勃然と起りつゝあります。私は茲において新芸術運動の前哨戦として左翼芸術の批判並に我々の要望する新芸術運動の将来に関して、同志の所見を承りたいと思ひます。

と述べ、それに続く形で以下の個別論稿が紙面の大半にわたって掲載されている。

- ・「プロレタリア芸術の単一理論を確立せよ「序論」」白柳秀湖
- ・「プロ・リアリズム運動の可能と必然」亀井貫一郎
- ・「プロレタリアリアリズムの文学」陶山篤太郎
- ・「顧て他を云ふ！」藤田喜作
- ・「無産大衆の芸術」阿部静枝

本論文では白柳以下の個別論稿の内容へは立ち入らないが、共通する視点は冒頭の赤松の文章に示されている。つまり「紋切り型の公式主義」であつて、「芸術的魅力に欠け」と言うような、前述した1927年2月の友田本二の視点とほぼ同じ理解のままである。

しかしながら、「真に無産階級のリアリズムに立脚する正しいプロレタリア芸術」という言葉に表されるように「左翼芸術」側で提唱された「プロレタリア・リアリズム」の概念からフィードバックを受けた痕跡が見られるなど、「左翼芸術」関連の情報・認識は27年時点から確実にアップグレードされていることも見て取れる⁽¹⁴⁾。

要するにこの特集記事は、「左翼芸術」側の作家・批評家らの文章（『戦旗』本誌とまでは行かずとも、一般新聞・雑誌・単行書レベルのもの）をある程度理解した上で書かれたものと考えられる。

ではなぜこの時期社会民衆党機関紙上で、党機関紙部長が音頭を取つてこのように大々的な特集記事（左翼文芸批判・自派の新芸術運動確立目指す）が書かれたのだろうか。その理由として考えられるのが、当該期のプロレタリア文化運動に起こつた諸事件である。

1930年5月20日、非合法共産党への資金の提供を理由に「全日本無産者芸術聯盟」（ナップ）傘下の団体所属の文化人（小林多喜二・中野重治ら）が一斉検挙される事件が発生した。この事件以後、前年大躍進を遂げたプロレタリア文化運動は一時沈滞を迎えるが、『社会民衆新聞』の特集記事は明らかにこの事件の影響を受けているであろう。

またナップに対抗していた「労農芸術家聯盟」（労芸。葉山嘉樹・青野季吉ら、1927年11月の組織分裂で『文芸戦線』に残つた人々の組織。無産政党中央派支持）の内部でも作家の代作問題（所属作家井上健次の作品「訓令工事」を、同じく労芸所属作家岩藤雪夫の名義で『改造』に発表したことなどに端を発する事件）が発生、大きな混乱と不信が組織を覆う事態に陥っていた。

(14) このことは個別論稿の中に「プロレタリア・リアリズム」「生きた現実」「報告文学」など、当該期の『戦旗』（ナップ機関誌）を中心とするプロレタリア文芸でも盛んに使用された言葉が見られることから明らかである。

つまり文字通り「行き詰まれる左翼芸術」に代わり、社会民衆党が主導する形で「新芸術運動」を確立、無産者のパイ争奪面で優位に立とうとする社会民衆党の意欲の現れが、機関紙4面の大半を費やした特集記事なのである。前述した諸事件の影響で、プロレタリア文化・文芸自体には興味があるが、ナップ・労芸双方へ及び腰になっている大衆を取り込むため、両組織とは接点がなく、両組織とは違うと言うアピールを行い、文化運動における第三極を作らんとする意欲が特集記事の時点では存在していたと言えよう。

同号の「編輯ノート」に「理論の確立と同時に我等の作品がなければならぬと思ふ。この問題について党内外の批判を待つ。」と言う記述があることからわかるように、30年7月時点では意欲に満ちていた社会民衆党であったが、以後同紙にこの問題に関する記事・投稿・作品掲載はない。結果として笛吹けど踊らずといった状況のまま、これ以後『社会民衆新聞』にプロレタリア文芸・文化に関する記事が掲載されることはなかった⁽¹⁵⁾。

2 1932年上半期の無産政党と文化

(1) 社会民衆党末期の文化を巡る動き

ここからは1932年前後に起こった、無産政党右派・中間派両党（社会民衆党・全国労農大衆党）の文化に対する新しい動きを見ていきたい。32年7月結党の社会大衆党と文化の関係を考える上で、合同直前の両党の動きは非常に大きな意味を持ってくるからである。

まず社会民衆党の方の動きである。同党のこの時期の重要な出来事としては、32年4月15日の赤松克麿らの脱党が挙げられる。

赤松は党の草創期からの幹部であり、党機関紙部長・『社会民衆新聞』主幹として同紙刊行にも大きく関与してきた人物である。また、前述した同紙再刊第20号（1930年7月10日）のプロレタリア文化に関する特集記事を先導し、言わば党の文化方面対策を担い得る位置に立っていた人物だとも言える。

その赤松に加え、同党の出版物を一手に手掛けた出版社「クララ社」の経営者であった小池四郎や、党の事業部員で「民衆の夕」の運営統括者亀田一郎、さらには社会民衆党から地方政治進出も果たしていた詩人陶山篤太郎など、党の中で文化・メディア関連の事業に関与していた多くの人材をこの時社会民衆党は失ってしまう。

そして赤松らが新たに立ち上げた国家社会主義新政党「日本国家社会党」（32年5月29日結党）では、赤松を中心に再び文化へのアプローチが試みられることとなる。

32年8月25日、同党の関係者を中心とする「党支持ノ大衆的文化団体」として「日本国民文化

(15) 以上見てきたようなプロレタリア文化に関するまなざしは、社会民衆党の党外政治新聞『民衆新聞』でも共通していた。同紙第14号（1929年4月20日）の松本陽吉「左翼一派とプロ文士」・第49号（1930年6月1日）の椎木彦作「最近のプロ小説」などを始めとする二三の文芸時評記事がそれで、『社会民衆新聞』と同じく基本的には「プロ文芸」を批判しつつも、評価すべき点（前述代作問題の発端となった小説「訓令工事」など）は評価するスタンスとなっている。

この他同紙では、リレー小説「嵐を衝きて」（党関係の運動者が多数執筆に参加）や、「民衆俳壇」欄設置など、機関紙でないからこそ可能な文化への独自の試みがなされていた。

同盟」が結成される（委員長 近松秋江・顧問 生田長江）。この新しい文化団体には、先に述べた 亀田一郎・陶山篤太郎など『社会民衆新聞』「民衆の夕」で社会民衆党の文化活動に携わった人物が多数所属していく。

文化同盟の結成に際して赤松が、日本国家社会党の機関紙『日本国家社会新聞』第4号（1932年8月25日）に寄稿した文章が「文化同盟の結成を望む」である。文中赤松は、「一般の国民大衆をして党を信頼させ実践の意思を湧きたゝしめるところの強力な文化運動」が重要であると述べ、文化同盟の活動を通して「常に党の運動を支持し、党にとつて障害となる一切のものを撃破しなければならない」と明言している。

「党の運動を支持」する文化運動を作るという強い志向は、前述した『社会民衆新聞』特集記事の頃と同じである（＝社会民衆党の文化へのまなざしを主導したのが赤松だとの証左にもなる）。また「党を信頼させ実践の意思を湧きたゝしめる」文化運動と言う観点は、共産党影響下の当該期プロレタリア文化運動（1931年11月に「日本プロレタリア文化聯盟」（コップ）を結成し、党員となった文化人が更に自発的に党運動後援体制を構築）の実状を踏まえた観点だと言えよう。

こうして強い意志と高らかな掛け声で始まった国家社会主義文化運動であったが、実態としては、「結成以来同盟ノ運動シテ見ルベキモノ殆ドナク、同盟ガソノ最モ重大ナル使命トスル機関紙「国民文化」ノ発刊スラ遂ニ実現ニ至ラズ、全ク有名無実ノ状態」⁽¹⁶⁾と官憲側の史料に記されるような、「笛吹けど踊らず」状態であった。また国家社会主義運動自体もこれ以後内部抗争・分裂を繰り返し、大衆の「信頼」・有意義な「実践」からは程遠い形の運動へ向かっていく。

以上のような流れを経た結果1932年7月前後の社会民衆党は、文化に対する強い志向を持ち、実践活動に携われる人物を欠いた状態で合同を迎えることとなる。

（2）全国労農大衆党末期の文化を巡る動き

次に全国労農大衆党の方の動きを見ていく。同党のこの時期の重要な出来事としては、党関係を軸とする「労農文化聯盟」結成の動きが挙げられる。

32年3月に同党の側から文化団体結成に向けての懇談会の呼びかけがなされ、3月30日に第一回準備懇談会が持たれたが、その開会挨拶で田原春次（全国労農大衆党）は以下のように述べている。

党は昨年の全国大会で文化的方面の活動を決議し、組織委員会に於てその具体案を考究中であつたが、全農或ひは労働組合方面で最近非常にその必要を欲求してゐるので、こゝに新しき無産者文化団体結成に關しての懇談会を開催、有志の方々の参集を願つた次第です。⁽¹⁷⁾

田原は続けて新団体と党の関係について、「労働者農民無産市民の結合体たる大衆政党的歴史的役割の上に立ち、全国労農大衆党を支持しその線に沿ふ文化運動を展開する」ことを謳っている。

(16) 内務省警保局編『社会運動の状況』1933（昭和8）年、630頁。

(17) 「無産者文化団体結成準備懇談会（第壹回）報告」（大原「TC-3」）。

また本資料は、『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』（丸善雄松堂、2017年10月）にも収録されている（DPRO-2455）。以下同資料集収録資料には資料集の資料番号も併記する。

考え方としては国家社会党の赤松と同じベクトルのものである。

前述した共産党系の文化団体「コップ」が労農大衆党の党大会前月（31年11月）に結成され、傘下団体の機関紙誌が整い始め、活動が軌道に乗っていた時期という当該期の状況も加味すると、合法無産政党側の文化団体に対する過剰なまでの期待も納得できようか。

こうして動き出した文化団体結成の動きは、党本部へは党の「外郭団体」結成として報告され、その仕事を田原春次に一任するとの決定がなされた⁽¹⁸⁾。ここでこの動きのキーマンたる田原春次（1900～1973年）について少し整理しておく⁽¹⁹⁾。

田原は福岡県京都郡行橋町（現行橋市）出身。早稲田大学専門部を卒業後渡米、帰国後朝日新聞社員を経て1930年8月全国大衆党に入党、機関紙部主任などとして活動した人物である。

文化運動との関わりで言えば田原は、『労農』・労芸の中軸者である堺利彦・鶴田知也・葉山嘉樹と同郷（京都郡）という縁を持っていた。加えて早稲田在学中は柔道部を始め複数の団体で活動、その後渡米経験を活かして海外移民関連雑誌への投稿も多数手がける、というマルチな活動経歴を持つ人物である。

その田原と文化運動・文化との本格的な関わりは、懇談会の一年ほど前の1931年2月に起点を置くことができる。同月開校した「堺利彦農民労働学校」（於京都郡豊津＝堺利彦郷里）の運営に携わった田原は同校の講義を担当した鶴田知也や校長 堺利彦ら『労農』・労芸系の人々と本格的な交流を持つこととなる。

加えて田原と文化の関わりで重要になるのが、同年の11月25日に東京で開かれた「堺利彦農民学校の夕」である。このイベントは、堺利彦農民労働学校の資金捻出を目的に開かれたものであるが、プログラムの作成・出演者の招聘等に田原が大きく関与している（文末表e）⁽²⁰⁾。

映画・歌唱・講演などこれまで見てきた無産政党系「夕」のフォーマットに忠実なラインナップに加えて、このイベントの特徴となるのが「レスリング」「拳闘」である。スポーツの実演という演目はこれまでの、そしてこれ以後の無産政党系（共産党系は勿論）文化イベントとしては未曾有の試みである。また関係者の回想によると、レスリングの試合におけるルールの説明を田原本人が手掛けていたとのことで、この分野に関する深い理解と強い意気込みがうかがえよう⁽²¹⁾。

ここで田原とこの両競技との関係を考えてみたい。後年に作成された田原の選挙宣伝ビラの中に社会大衆党党首安部磯雄の推薦文として、「同君は早大卒業後世界行脚の旅に出て、北米南米至るところで柔道拳闘の試合をやつたり、大学で勉強したり労働したり六七年の見学を了つて帰朝⁽²²⁾」と言う記述がある。このことから田原は、海外留学中にボクシング・レスリング双方に触れていたことがうかがえる。

また実は日本のアマチュア・レスリングは、早稲田大学の柔道部をその基点の一つとして持って

(18) 全国労農大衆「組織委員会々議報告」（1932年4月12日。大原「政党17-10」）。

(19) 『近代日本社会運動史人物大事典』3（日外アソシエーツ、1997年）373-374頁、町田聡「田原春次再考——聞き取りと新資料から」（『リベラシオン 人権研究ふくおか』No.138（社団法人福岡県人権研究所、2010年6月））96頁他を参考。

(20) 田原春次書簡（1931年11月16日。大原「TM-2」）。

(21) 広野八郎『葉山嘉樹・私史』（たいまつ社、1980年）72頁。

(22) 「浄化の肉弾 民軍の闘将 田原春次推薦大演説会」ビラ（〔1936年1月23日以降〕大原「政党18-10」）。

いる。そしてその草創期の日本レスリングを牽引した一人が上記プログラムで「試合解説」・選手「推薦」を行った庄司彦男〔雄〕である。彼は早稲田大学卒業後に田原と同じく北米留学し、現地でレスリング競技を学び、帰国後母校早稲田にレスリング部を設立した人物⁽²³⁾として知られている。

加えて庄司は戦後政界に転じ田原と同じく海外同胞引揚運動に関与し、1947年の衆議院選挙では社会党から当選を果たしている。こうした流れの中に同じような経歴を持つ田原と庄司の接点があり、この接点から田原が庄司を「農民学校の夕」へ招聘したと考えるのは自然であろう。

ボクシングに関しては、田原のもう一つの経歴である移民運動が関係してくる。先に海外移民系雑誌へ田原は頻繁に寄稿していたと述べたが、そうした移民系雑誌の一つ『海外』の編集・『植民』への寄稿などを行っていたのが、上記プログラムで拳闘の試合「解説」を行った平澤雪村（雑誌『拳闘』主宰者）である。こうした関係から田原とボクシングとを結ぶ接点生まれ、田原が平澤を「農民学校の夕」に招聘したと考えるのもまた自然であろう。

ここまでの流れを少し整理・補足してみたい。「堺利彦農民学校の夕」と言う催しの持つ特異性からうかがえるのは、党の外郭に文化団体を作る上で、

- ①『労農』・労芸系：上記の京都郡人脈⁽²⁴⁾
- ②早稲田系：レスリング 庄司彦男
- ③海外関係：ボクシング 平澤雪村⁽²⁵⁾

という、三方面へのコネクションを兼ね備えた特異な人材が田原であったと言う点である。加えて田原自身が新規事業への行動力に溢れ、アジプロのノウハウに長けていた点も大きな意味を持つてくる。そして、何よりも田原がこの「農民学校の夕」というこれまでの無産政党系「夕」にはない多彩な構成のイベントを成功させ、文化が無産政党運動にもたらす可能性に対する自信（「過信」とすら言ってよい）を得た点こそが、これ以降の全国労農大衆党と文化の関係において大きな意味を持つこととなる⁽²⁶⁾。

話を第一回準備懇談会以降に戻す。32年4月以降も度々懇談会が設けられ文化団体の結成へと歩を進めていくが、その過程で次第に問題も浮き彫りになっていく。

(23) 山本千春「日本レスリングの黎明」（日本アマチュア・レスリング協会編『レスリング 世紀の闘い』（双葉書房、1952年））10頁他。

(24) 「京都郡」関係ではないが、1930年に田原が主催した「浅草労働学校」で文学講義を行った青野季吉もこの中に入るか。

(25) 1930年の全国大衆党「渡米団」で田原と同道した木村毅もこの中に入るか（雑誌『新青年』等で交流）。

(26) 田原春次書簡（註20前掲）には、「一夜にして、独唱、映画とボキシング、レスリングの妙味までも味はれるのは今回のが始めて」である点が「夕」のセールスポイントとして強調されている。まさに田原は自身の目論見の通りに催しを盛り上げることに成功したのである。

労芸所属作家広野八郎は、後年「農民学校の夕」について鶴田知也のアイデアだったとした上で、「田原春次氏の、奔走に負うところ多かった」とも語っている（広野八郎「回想「堺利彦農民労働学校の夕」——没後六十年を迎えて」（『読売新聞』西部本社版1993年10月1日夕刊））。どこまでが鶴田の案で、どこからが田原の案だったのかは広野の回想からは読み取れないが、両者共にその後労農文化聯盟結成を推進する中軸となった背景として、「農民学校の夕」の成功が大きな影響を与えているのではないか。

また1930年秋の全国大衆党主催の催し「インタナショナルの夕」が、収益面で失敗に終わっていたことも重要となる（「インタナショナルの夕 報告書」（〔1930年〕9月29日。大原「政党16-19」。文末表c）。このイベントに協力した木村毅と、その後に「農民学校の夕」を成功させた田原の間の無産政党と文化に関する温度差が、以下に述べる「労農文化聯盟」結成時の第一の見込み違いの淵源だと考えられるか。

第一の問題は、当初当て込まれていた所謂「ブルジョア文壇」方面の取り込みである。新団体の結成に合わせて、「文壇の作家、地方の文芸家の中にアツピールする」目論見の下、準備会発起人の一人でもある木村毅（日本労農党～全国大衆党で出版部長を務める）に文壇へのアプローチが期待されていた。ところが当の木村の側からは「労農文化団体協議会」宛に、

小生は明白に田原君に今際かゝる協議会をつくることは反対なる旨を述べておきました。随つて今後と云へども協議会には出席しない旨重ねて御通知致しおきます。(27)

という完全拒絶の書簡が届けられている。その結果準備会の側では、懇談会で労芸からの出席者（長野兼一郎）が「一寸目算がはづれた」と発言するなど、明らかに当惑している様子が資料からうかがえる(28)。

これに加えてもう一つの、しかも最大の誤算となったのが新文化団体の中核として位置付けられていた労農芸術家聯盟の解散である。

新文化団体結成の動きが進んでいたのと全く同じ時期に、政党の方面では社会民衆党と全国労農大衆党の間で合同協議が本格的に進んでいた。そうなると大衆党支持で固まっていた労芸も必然的に新政党支持へ、との流れが生まれるのだが、これまで機関誌『文芸戦線』や、友誼団体である『労農』で批判し続けてきた「右派」の社会民衆党との合併を支持できないと考える人々が労芸内部で大きくなり始めていた。新文化団体は政党合同によって「右翼化」した新政党を支持することになりかねず、そうなる位ならば文化団体結成には反対である、という声を挙げる文芸者も少なくないものとなっていた。

前述の「堺利彦農民労働学校」で田原と交流を持った同郷のプロレタリア作家 鶴田知也は後年の回想で、新文化団体に向けた田原の動きを「党文化部」結成の目論見だと考え、「選挙の応援」に動員されることへの反発が当時自身の中にあったことを述べている(29)。後年の回想だと言うことは差し引いても、「党文化部」という考え方の背景には（当時の共産党とコップの関係が外部からどのように受け取られていたかも含めて）、前衛党と大衆団体の関係における当時の理想像が見えてくる(30)。新党「社会大衆党」と文化団体はそういう意味では当時のプロレタリア文芸者の理想像

(27) 木村毅書簡（労農文化団体協議会準備会宛。大原「TC-3」。『資料集』DPRO-2525）。

(28) 「第参回懇談会報告」（大原「TC-3」。『資料集』DPRO-2461）。

(29) 鶴田知也「葉山嘉樹さん」（三人の会編『葉山嘉樹 真実を語る文学』（花乱社、2012年）。『朝日新聞』西部本社版1984年2月18日夕刊初出）131頁。

(30) 広野八郎は、田原の提案に沿い賛成派（鶴田知也・伊藤永之助ら）が作った「指導方針」に、文戦は「もっと高度なものとなり、下部組織の指導的役割を果す」という主旨が盛られていたと回想している（広野前掲書72頁）。

要するに労芸・田原双方が参考としていた文化団体と党の関係は、共産党とコップのそれと同一地平のものであったと言えよう。また『読売新聞』の連載記事中でも、労農文化聯盟は「プロ文化聯盟」（コップ）による戦線攪乱防止のため「旧労農大衆党側から」要請を受け作られたものだと説明されている（「新興芸術団の離合とその陣営1 「文戦」のバラバラ合戦」（『読売新聞』1932年9月20日））。

つまりは同時代的な語りも含め、この問題に関与した多くの人々が労農文化聯盟を大衆党文化部と認識していたが、実際は田原次次に丸投げされた状態で無産政党再編を迎え、その後党・田原ともに聯盟に深入りできず梯子を外される形になったことが聯盟結成における最大の不幸と言えるか。

から外れた好ましくないものだったのだろう。

こうしたメンバーの葛藤が続く中、新文化団体結成に先立つ32年5月に突如労農芸術家聯盟は解散を声明する。理由としては相次ぐ機関誌発禁などに伴う財政難などが挙げられているが、解散後旧労芸所属の文芸者たちは大きく二派（左翼芸術家聯盟・プロレタリア作家クラブ）に分かれて独自に活動を行うことになる。新文化団体への協力を選んだのは「左翼芸術家聯盟」（青野季吉・鶴田知也ら）であるが、強力な文化団体の基盤となる統一の文芸者組織という前提は、新文化団体設立直前に失われてしまっていた⁽³¹⁾。

以上見てきたような目算外れを抱えながら、32年6月19日新文化団体「労農文化聯盟」は誕生した。しかし誕生後「聯盟」として特筆すべき活動が行われたような形跡は見当たらず、前述した「日本国民文化同盟」と同様・同時期に有名無実の団体となってしまった⁽³²⁾。

また社会大衆党の結党後の32年10月、文化団体結成を一任されていた田原春次は故郷福岡での農民運動に移ることとなり、文化団体の統御が事実上不可能となった⁽³³⁾。つまり労農文化聯盟は、成立まで相当な困難を要したにもかかわらず、その成立直後に組織運営に強い意欲を持った人物を欠くという「笛吹き」すら（＝当然「踊る」者も）いない状態になってしまったのである⁽³⁴⁾。

以上ここまで社会大衆党成立直前の文化を巡る無産政党周辺部の動きを見てきたが、いずれにも共通することとして、文化との関わりへと意欲を見せる人物（赤松克麿・田原春次）が新しい運動を立ち上げるが、その人物を欠くことで運営が先細り、自然消滅するという流れが見て取れよう。

3 社会大衆党と無産者芸術・文化

(1) 『社会大衆新聞』記事に見る社会大衆党と文化

上記の流れを経て、文化に対する意欲を持つ人物を失った新党「社会大衆党」は文化に対しどのようなまなざしを見せたのか、同党機関紙『社会大衆新聞』記事から見ていく。

前身紙『社会民衆新聞』を第39号（1932年8月15日）より改題した同紙では、文化関連記事はあまり多いとは言えない。まず目につくのは第44号（10月25日）に掲載された、「党報第六号「第一回青年部委員会報告」（9月29日）」の中にある、「プロレタリアスポーツに関する件」という党報記事である。その中では、「各地支部の情勢に依つて、野球、柔道、剣道等のスポーツに依り団体的訓練、党前衛隊としての気力を養成すること」との指令がなされている。

(31) 「堺利彦農民学校の夕べ」で異彩を放ったレスリング・ボクシングもまた32年には団体分立状態（ボクシングは同年に分立を解消）にあり、レスリングは同年のロサンゼルス五輪への代表団派遣すら危ぶまれる事態となっていた（日本体育協会編『スポーツ八十年史』（日本体育協会、1958年）264・326頁）。こうした状況では到底強力な文化団体の一翼を担い得ない（+接点を持つ田原も中央に不在）。

またこの時に分裂した旧労芸系の二団体は1934（昭和9年）1月、荒畑寒村の仲介で「労農芸術家聯盟」として再合同するが、その後目立った活動をなし得ず同年中に自然消滅する形となる。

(32) 『社会運動の状況』1934（昭和9年）、318頁。

(33) 前掲町田聡論文、97頁。

(34) 全国大衆党時代から党事業部長を務め、創立当初の労農文化聯盟役員でもあった平野学も、田原に代わり文化関連の差配が可能な人物だったが、聯盟宛に「党務と貴聯盟の任務と両々相果し得ない」ため役員辞任を申し出る書簡を送り、聯盟の職を辞している（平野学書簡（金子洋文宛）1932年7月7日（大原『資料集』DPRO-2493））。

この点に関しては、前述した全国労農大衆党の末期に、同党が「労農スポーツ団」結成を試みているとの記事が一般新聞に掲載されている⁽³⁵⁾。社会大衆党が全国労農大衆党の運動方針を一部受け継いでいる証拠とも言えるが、スポーツ関連の所轄が党青年部に移り、「訓練」の手段が変わっている点に新党における変化（≒文化面の比重低下。闘う無産政党の防衛＝実務面の比重増大⁽³⁶⁾）がうかがえよう。

以後長きにわたって同紙からは文化関連の記事が姿を消す。その間社会大衆党は政党として着実に発展を遂げ、1936（昭和12）年には衆議院選挙で2桁当選を果たすまでになる。そうした結果を受け、久々に『社会大衆新聞』に文化関連記事が掲載される。それが第94号（1936年7月15日）掲載の投書記事「文化人奮起せよ」（北海道 山本誠吉）である。この記事では、

わが国に無産政党運動が起つて以来今日の如く躍進又躍進を続けてゐる時期はない。それに反し、一般大衆の啓蒙運動のないのはどうしたことであらう。

ことに私は我党の線に沿ふた文化運動の必要を痛感する。入場料一円の新劇、転向文学等々必ずしも無用だと云ふのではない。しかしそれ等は極く限られたファンが対象でしかないのだ。

今要求されてゐるのは我党に集中された百万の投票を対象とした啓蒙的文化運動である。進歩的芸術家、文化人の奮起を望む。

と述べられ、躍進した「百万」の党に相応しい文化を党自らが作り出すように奮起を促している。旧来の左翼文化の効用は認めつつも、躍進した社会大衆党にはそれに相応しい新文化があるはず、との前提で論が進んでいるが、そもそも党主導の文化運動とは、32年の新文化団体結成の裏事情（「ブルジョア文壇」の取り込み・プロレタリアスポーツの頓挫など）を知る者からすれば「いつか来た道」であり、知らぬ者からすれば気付かぬ間に蹉跎していた道なのである。

しかも昭和10年代に入り、かつてのプロレタリア文化運動は既に組織的活動を終焉させていた。加えて元プロレタリア文芸者たちの自由な交流・交遊を目指し、1935（昭和10）年に設立された「独立作家クラブ」すら（政治的活動を規約で否定していたのだが⁽³⁷⁾、36年の「二・二六事件」以降の戒厳令に伴って一切の活動を差し止められていた⁽³⁸⁾）のが、この投稿記事の出た時期の状況

(35) 『朝日新聞』1932年4月12日。新文化団体の準備会でも、「大衆党芝支部、深川支部方面でプロスポーツ道場設置の機運あり」と報告されていた（『準備会ニュース』No.3（労農文化聯盟準備会書記局、1932年6月17日）。芝区には「堺利彦農民学校の夕」でボクシング選手を派遣した「帝国拳道会拳道社」（現「帝拳」）道場が存在）。

(36) 党防衛の面から文化団体との接点を求める動きは全国労農大衆党の時代から存在していた。それが「全国労農救援会」構想で、「党の恒久的シンパの外郭的組織」として、労農の組合だけでなく「友誼文化団体並に研究所」も組み入れた形の救援会組織構築が提起されている（「第三回常任中央委員会議案」1932年1月10日（国立国会図書館憲政資料室所蔵「浅沼稻次郎文書（その1）」リール2、コマ349））。

そう考えると32年初頭大衆党と文化の接続には、田原の文化聯盟路線の他に「全国労農救援会」路線が存在し、組織としては労農文化聯盟を生んだが、社会大衆党の結成後は労農救援会＝党防衛・自衛のためのスポーツ活用が実質的には進められていくという見方も可能だろうか。

(37) 「独立作家クラブ」設立趣意書（『文学評論』3（1）（24）（ナウカ社、1936年1月）131頁）。

(38) 中野重治「独立作家クラブの頃——知識人の戦争体験」（『新日本文学』11（8）（新日本文学会、1956年8月）74-75頁）。

である。要するに「百万の党」に相応しい文化を作ることは、大躍進をした政党がリスクを負ってまで行うほどのリターンが得られるものでもなければ、行い得るものでもなかったのである。

この後『社会大衆新聞』紙上には、「文化時評」記事（94・95号）⁽³⁹⁾、市井の文化的催し（蚤の市等）のルポ記事（125～127号）⁽⁴⁰⁾、あるいは衆議院での「映画法」の審議に関し「我党提唱の文化政策」と銘打った国会質疑の記事⁽⁴¹⁾が散見される程度で、「百万」の党に相応しい文化はおろか、同紙が文化について取り扱うこと自体もないまま、1940（昭和15）年7月の解党と同紙の終刊を迎えることとなる。

（2）新聞外に見る社会大衆党の文化へのまなざし

これまで見てきたように『社会大衆新聞』紙上だけで見れば、社会大衆党はこれまでの無産政党の中で最も文化へのまなざしが弱いと感じられる。では機関紙に表れない部分ではどうだったのであろうか。

同党の大会報告書等では、「一般工作方針」として、「映画、演劇、文学、音楽その他の文化運動の組織を通じて大衆を獲得し更らに各種の積極的工作により、弁護士、医師、官公吏、軍人、学生、教師等のインテリ層の間に広大なる各種外郭組織の結成」が必要である旨明記されていた⁽⁴²⁾。

しかし実際の運動では、合同前の両党の各種イベント運営を担った党事業部の報告文を見ても、イベントはおろか文化の方面への具体的取り組みの記載は全く見られない。この点でも社会大衆党になって以降の、文化に対する「まなざし」がうかがえよう。

文化団体への働きかけと言う方針は1936年末の第五回党大会報告書まで見られる。しかしその後は党の大躍進・日中戦争開戦などに伴って文化方面に関しては、「東亜新秩序」に絡んだ「新文化」建設の文脈でのみ語られるようになる。例えば1937（昭和12）年11月の党大会提出議案「戦時下運動方針書」では、日中戦争を「人類文化の発展に貢献せんとする日本民族の聖戦」と定義した上で、「資本主義に非ざる日本の歴史と民族性に適応する新文化の建設」を目標として掲げている⁽⁴³⁾。

この記述からは同党が旧来より持つ「三反主義」的な要素を残しつつも、これまでの同党及び、合同前の無産政党の語りにはない形の文化の語り方がうかがえる。加えてこの時期には、前述した「一般工作方針」のような具体的方針明示もなくなり、以前にもまして文化へのまなざしが顕著に後退していく。

結局社会大衆党は、合同後最初から最後まで文化への明確な、一定の明確なまなざしを持っていないまま、戦時体制へ飲み込まれていき、やがて1940年の解党を迎えることとなる。

(39) 戸坂潤「帝国芸術院余論」（1936年7月15日）、刀田八九郎「文化確立の運動」（7月28日）。後者では、従来日本のインテリ層の間に「ロシア文化の引き写し」が多かったが、これからは「日本の再認識」「日本文化の確立」が必要であり、社会大衆党も「かうした文化運動に積極的な関心を示すべき」だと述べられている。

(40) 「文化を探る」と題し「空也上人の像 元寇と美術」（125号（1938（昭和13）年12月15日））、「浅草の掘出物 堅実な娯楽性」（126号（1939（昭和14）年1月1日））、「常盤・静・巴 皮相なデパート文化」127号（1月21日）のルポ記事が掲載されるが、短期間で連載終了となる。

(41) 『社会大衆新聞』130号（1939年4月10日）。

(42) 『社会大衆党昭和八年度大会議案』（昭和8年12月8～10日。大原「政党18-2」）21頁。

(43) 「第六回全国大会議案」（『昭和十二年度 闘争報告書』（昭和12年11月15日。大原「政党18-4」））9頁。

おわりに

以上主として『社会民衆新聞』『社会大衆新聞』掲載の文化関連の記事を中心に、右派無産政党の系譜である社会民衆党・社会大衆党の文化へのまなざしを見てきた。

その中で興味深いのは、無産政党内の右派であり、当該期に隆盛を迎えたプロレタリア文化運動と相対的な距離が最も遠いはずの『社会民衆新聞』が、政党機関紙としては最も積極的に文化関連記事を取り上げていることである。文化運動と距離が近いはずの中間派諸政党が、相続いた組織の分裂・再編過程で機関紙に一貫性・継続性が確立できなかったこと、加えて「日本大衆党」以降の中間派諸政党・1928年末以前の労働農民党の両党に近い文化団体は自前の文芸雑誌（労芸機関誌『文芸戦線』）を持っていたことが、中間派系の党機関紙で文化をあえて取り上げない・取り上げ得ない理由になったのと比べると対照的である。

また無産政党における文化活動は、あくまで労働者の「慰安」による自党への引き付け及び、イベントを通じて得られる資金獲得を主目的としたものであった。それ故、思想性の強い演劇上演などではなく、商業映画や歌舞音曲のような娯楽演目が政党主催の「夕」イベントの中心へと位置付けられていった。

しかし催しや機関紙による文化の取り上げは、党内に強い意欲を持つ人間が存在しなければなし得ないものであった。社会民衆党の赤松克麿・大衆党系の田原春次はその代表例であり、こうした一握りの人間の意識と実行力に支えられて無産政党と文化の関係は成り立っていたのである。

1932年7月の合同単一无産政党 社会大衆党の誕生直前にこうした一握りの人間の内、あるものは党を去り、あるものは中央での文化団体統御の任を事実上解かれ、合同新党には文化に対し意欲と実行力を持つ人間が存在しなくなった。結果同党は文化との適切な関係を築くことができず、後年国政選挙で躍進を遂げた時には、もはや躍進党に相応しい文化を自前で作り出すことは不可能になっていた。

加えて単一无産政党となった社会大衆党はこれまでと異なり、党活動における他党との無産者争奪戦の占める比重が低下していく。合同後の同党の対抗相手は既成政党であって、国政の場では無産者をどれだけ慰安できたかでなく、政治的な実績の多寡が政党としての支持を左右する要素となる。加えて合同による組織拡大の結果、党資金捻出のための催しも次第に必要とされなくなる。その結果社会大衆党の文化へのまなざしは大きく後退せざるを得なくなるのは必然であろう。

こうして文化への明確なまなざしを持てなかった社会大衆党が、戦時下「新文化」の題目を受け入れ、「東亜新秩序」と「聖戦」を後援する政治勢力となっていくのもまた必然ではなからうか。

以上見てきたような流れを戦前期に経験した無産政党関係者の多くが、戦後には日本社会党へと集い、「はじめに」で触れた松本淳三のような意識の下、文教政策をも担わなければならない政権与党の地位にすらくことになる。その時彼らは文化に対しどのようなまなざしを向けようとしたのか、という点に関しては本論文の範囲を超える領域となろう。

（たてもと・ひろゆき 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）

表 無産政党関連「夕」プログラム一覧

	a	b	c	d	e
	第一回「民衆の夕」	「民衆の夕」	「インタナショナルの夕」	第四回「民衆の夕」	「堺利彦農民学校の夕」
開催日	1927年6月12日	1929年5月11日	1930年9月25日	1931年7月26日	1931年11月25日
演目	一、開会の辞 主幹 赤松克麿	映画『ベタオール』 『第五階級』(説明 山縣天洋 武井秀輔)	講演「新貞操論」 織本貞代	一、左翼新内 『アジアの嵐』 岡本文彌	漫談 徳川夢声
	二、映画『九官鳥』 水谷八重子主演 説明 西村楽天	歌唱 ダン 道子 (ソプラノ)	「ツルゲーネフにあらはれたるロシア革命」 麻生久氏	二、舞踊 高田舞踊 団	独唱『農民の歌』 及川道子
	三、講演 安部磯雄	漫談 徳川夢声	プロレタリア音楽 ・ドイツメーデーの歌(独語) ・英国メーデーの歌(英語) ・プロレタリア行進曲 ・各国労働歌	三、独唱 メツソソ プラノ 四家文子	校長挨拶 堺利彦
	四、漫談『現代社会 相』 大辻司郎	挨拶 片山哲	レコード 解説及司会 木村毅 ・労働党の失業対策=マクドナル[ママ] ・財政問題=スノーデン ・女性進歩好機=ボンドフィールド女史 ・保守党の功績=ボールドウィン ・世界平和と英国の将来=ヘンダーソン ・自由党と失業対策=ロイドジョージ ・新経済政策について=レーニン ・同志よ立て=リープクネヒト ・ファシスト行進曲=ムッソリーニ原作 ・憲政に於ける輿論の勢力=大隈重信 ・外にゴルキー、トルストイ著書	四、舞踊 花柳曙会	講師挨拶 堺真柄
	五、映画『農民の一生』 原名「プロカシカ」 トルストイ原作 説明 徳川夢声		映画 ドイツ映画 『巷の失業と淫売婦』 解説 徳川夢声 『青春婦』 解説 柳原白蓮	五、映画 月形龍之 介主演 『斬人斬馬剣』	レコード演奏 コロンビア名 作
					犯罪と医学 高田義一郎
					煙草の話 馬場孤蝶
					マンドリン独奏 永井叔
					題未定 麻生久
					感想(交渉中) 長谷川如 是閑
				舞踊A:鞭 B:インタナショナル 花園 歌子一党	
				雑話 野球と芝居 森田草平	
				漫談 ハリウッド挿話(交渉 中) 上山草人	
				レスリング 解説と模範試合 解説 田原春次 審判 庄司彦雄 選手 庄司氏推薦	
				拳闘 解説と模範試合 解説 平澤雪村 審判 川田藤吉 選手 拳道社推薦	
				映画A:短篇一種 B:ソウエート名画 『トゥルクシブ』 全七巻 説明 渡邊狂花	
				閉会 鶴田知也	
備考	映画の上演順変更 (四)が「木琴と漫談 三村珍文 三味線 杵 屋春重」に変更	映画のタイトルは新聞 表記ママ。他に新聞 未表記の演目ありカ	映画タイトルは新聞表記ママ。「レコード」 は「コロムビア・コルスター使用」		司会 葉山嘉樹

※『社会民衆新聞』第24号(1927年5月15日)、再刊第6号(1929年5月25日)、再刊第30号(1931年7月25日)、「インタナショナルの夕」報告書(1930年)9月29日、大原「政党16-19」、田原春次書簡(1931年11月16日、大原「TM-2」)を元に筆者が作成。